

中北海道

現代俳句協会

会報
101号

令和6年
7月23日発行

発行人 五十嵐 秀彦
発行所 中北海道現代俳句協会
〒064-0952 TEL 011-641-1007
札幌市中央区宮の森二条八丁目の一八Fよしと方
編集人 青山 醉 鳴
〒061-1354 TEL 090-333983457
恵庭市島松旭町四丁目九の一

新しい時代を創っていきましよう



中北海道現代俳句協会会長

五十嵐 秀彦

今回の会報が一〇一号だそうです。多くの人と同様に、私も一号からの会員ではありません。一〇〇号を超えたことに何の功績もないのです。ただただ先達の努力を思い返すだけです。

俳句はまことに小さな詩であるけれど、その愛好者がいなくなることはありません。もちろん当会の会員数のように増減はありながら、俳句を愛する人の熱意に変わりはしないのです。なぜこれほどに人をひきつけるのか。それはたつた十七音の言葉が無限に深い奥行きを持っているからでしょう。感情に直接突き刺さってくる。まさに「寸鉄人を刺す」です。十七音で説明できる理屈であれば、それは十七音で完了してしまって、幅も奥行きもない。俳句の美点は理屈を述べないところに

あるはず。だからこそ心の一番やわらかなところを突き動かします。

馬の尻馬の尻こは雪の国 細谷源二

こんな源二の句を例に出すまでもなく、理論でも理屈でも説明でもなく、真骨頂があるのです。いろいろな詩型のある中で、俳句こそ韻文性において散文の最も対極にあるものだろうと私は考えています。

そんな俳句に恋してしまった表現者が個々の個性を引上げ集まっていたのが現代俳句協会であり当会であることを忘れたくないものです。現代俳句協会設立時の精神は語り継いでいかねばなりません。封建的なボス支配を壊し、民主的で自由な作家たちによって支えられる俳句界を創ることが、終戦後に協会を設立した人々の初心であったはず。私達はただ集まっているのではなく、独立した作家として互いに交流し研鑽するためにここに集っています。その自覚さえ失わなければ、会員人数の大小など気にせずとも、活気ある刺激的な文芸集団として先達の努力を引き継ぎ発展させることができるでしょう。

当会ではこれまでやらなかった新しい企画も準備中です。今年はどうも具体化できるかはまだ定かではありませんが、全ての俳人や俳句に関心を持っている人たちにとって参加したいと思わせるようなイベントをぜひ実施していきたいのです。内に向かった企画ではなく、外に向かった開放的な場を作っていくように考えています。それは会員の皆さんにとっても刺激になるでしょうし、会員ではない人達にとっても俳句の魅力を知ってもらうよい機会となるはずです。もちろん主催者の考えを押し付けるのではなく、主催者自身が企画の実行を通して新しい気づきを得るような柔軟なイベントでなければなりません。失敗するかもしれませんが、失うものはないはずです。そんな行動する中現俳の姿を丸裸のままに提示することで、新しい仲間も増えていくかもしれません。ぜひそうやってほしいものです。

新しい取り組みはこれまでの広報手段に加えてネットも活用して実施されることになるでしょう。それを奇抜と感じ、なじめないと思う会員の方々もいらっしゃるかもしれません。しかし俳句が自由な文芸である限り発信方法は多様であり、無限でもあると信じています。まずは進みましょう。会報の号数を数えている場合ではないのです。

(いがらし・ひでひこ) 俳句集団 [Itak]

第三十三回

中北海道現代俳句大会報告記

亀松澄江

R6. 4. 7 (日) 於
かでる2・7

大会は四月七日(日)、五十一名の参加を得、かでの2・7に於いて十三時より開催された。

中田琢志事業部長による開会の辞の後、五十嵐秀彦大会長の挨拶。コロナ三年間の巻き返しの時期に来て、楽しめるイベントを増やし増員に繋がりたいと思っていること。一人一人が独立した作家である認識を持って俳句に向かつてほしいこと等述べた。

続いて、講師石川青狼東北北海道現代俳句協会会長を紹介。演題は「河東碧梧桐の俳句と書字」、俳号の話から始まり、「えぞにう」齋藤青火主幹の「青」を拝領し、病後間もなくのこと故、狼のような強さを願う「青狼」と命名したと。笑いの絶えない中、碧梧桐は現代の前衛書家よりも前衛であること、そして資料と共に書字の変遷へと話は佳境に入る。俳句もしかり、「寝るまでは起きていた大地の光」は、自由律に拍車をかけ、季語も無くブレイキの無い車のように現代俳句の先駆者は碧梧桐であると述べられた。

次に石本雪鬼副会長より、令和五年度北海道俳句協会鮫島賞受賞者の紹介があり、受賞者の五十嵐秀彦氏の挨拶の後、「雪華」を代表して中村みずほ氏より花束贈呈があった。

大会作品については、五十嵐会長、永野照子顧問、石本雪鬼副会長、亀松澄江、講師石川青狼氏五名の講評の後、瀬戸優理子氏の披露のもとに粛々と顕彰が行われた。

第二十四回中北海道現代俳句賞受賞者は安田中彦氏。五十嵐氏の選考経過報告の後、顕彰に移る。花束贈呈はイタツクの青山醉鳴氏。

Fよしと事務局長閉会の辞にて大会終了。

懇親会(出席者三十七名)は、十六時三〇分よりホテルポールスターにて。司会石本副会長の開会の辞、五十嵐会長の挨拶、齋藤雅美氏の乾杯で始まり、料理も美味で、皆、笑顔の春夕べであった。Fよしと氏のお開きの乾杯の後、中田氏の閉会の辞で散会した。(かめまつ・すみえ 草木舎・中現俳副会長)

第三十三回 中北海道現代俳句大会

入賞作品

大会賞一位 札幌市 関根 礼子

落葉踏む夫とは違ふ音立てて

大会賞二位 札幌市 中田 眞知子

星月夜ずしりと恐竜凶鑑かな

大会賞三位 札幌市 永野 照子

雪虫の漂ふ辺りいつも過去

雪嶺賞 札幌市 近藤 由香子

悴むやこゑが固体になる朝

縦賞 札幌市 内野 弓子

反戦の首が折れさう秋さくら

草木舎賞 札幌市 阿部 満子

帰る家あるにはあつてちゃんちゃんこ

アジュール賞 旭川市 橋本 喜夫

雪積もるくちびるのなき街に棲み

雪華賞 札幌市 平尾 知子

標本のピンの数だけ虫の闇

佳作賞 釧路市 石川 青狼

雪つぶて背中がうれしそうだから

札幌市 新出 朝子

人づてに死があり遠いものはな

札幌市 江草 一美

ほどほどをほどほど生きて新走り

旭川市 小畠 スズエ

英字新聞巻かれ長芋うろたえる

札幌市 坂本 眞紅

月磨き星を磨きぬ虎落笛

札幌市 加藤 由花

クレヨンを母に贈りし敬老日

札幌市 檜垣 桂子

下仁田葱立派りつぱと誉めて切る

札幌市 遠藤 静江

噴水をもち上げている子らの声

新得町 中島 土方

頭の中は文字の遊び場良寛忌

札幌市 小川 桂

白鳥の羽搏きがある新刊書

札幌市 渡辺 のり子

つくしんぼふぞろいがいい自我がいい

札幌市 松 王 かをり

ごめんねの蜜柑を投げて寄こしけり

札幌市 F よしと

葱にみそ机に錆びし六分儀

札幌市 小田島 清勝

永字八法ことごとく野分

札幌市 倉部 仁子

戦前の家の見取図小鳥来る

札幌市 ただすみれ

トマトまだ青く幸せの中にいる

※一人一賞のため賞外

札幌市 平尾 知子

せりなずな涙もろくてじよっぱりで

札幌市 平尾 知子

生き死にに印鑑ひとつ冬に入る

札幌市 平尾 知子

安らかな死があり葱のみじん切り

札幌市 永野 照子

狐火や同じところで人転び

札幌市 中田 真知子

鍼灸師の十指饒舌日脚伸ぶ

札幌市 江草 一美

白息が待ち白息が駆けつける

札幌市 永野 照子

冬の霧抜け来て兄にする化粧

会員内外のみなさまより数多くの大会出句を頂き、また当日も大勢ご参加くださいましたことに心より感謝いたします。(事業部一同)



冒頭の五十嵐秀彦会長による開会の挨拶風景。左は「河東碧梧桐の俳句と書字」の懸垂幕の前に着席される、講演・特別選者の石川青狼氏。

北海道俳句協会

第六十九回全道俳句大会

入賞作品(関係分)

札幌市長賞

札幌市 近藤 由香子

秋晴を四角に畳み白シート

札幌市教育委員会教育長賞

札幌市 菅井 美奈子

セーターを脱ぐセーターの息づかい

北海道新聞社賞

札幌市 高垣 卯八

就職の片道切符風光る

UHB道文化放送社賞

札幌市 腰崎 玲子

日溜りは二人の居場所福寿草

北海道俳句協会賞七位 札幌市 平尾 知子

靴紐をきつちり結び受験生

北海道俳句協会賞九位 札幌市 西村 山憧

大空に二文字書いて卒業す

札幌市 信藤 詔子

さえずりや自転車籠に離乳食

※一人一賞のため賞外

札幌市 平尾 知子

にんげんを忘れておりぬ日向ぼこ

(令和六年六月二日・ホテルライフォート札幌)

◆ 道内各地区現代俳句大会 ◆

第三十四回 北海道現代俳句大会

入賞作品(関係分)

細氷賞

札幌市 石川 美智子

木の根明く相席してもよいですか

(令和六年四月十四日・ときわ市民ホール)

第三十回 東北海道現代俳句大会

入賞作品(関係分)

北海道新聞釧路支社賞

札幌市 岡本 順子

お降りや母いなくても母の家

佳作賞

札幌市 遠藤 静江

流水来ギシギシ啼くも国訛

札幌市 信藤 詔子

改札を出て春愁の列につく

(令和六年四月二十一日・交流プラザさいわい)

南北海道現代俳句協会主管
三十三回北海道現代俳句大会報告記

江草 一 美

R6. 6. 9 (日)
於 函館ホテルソル

しのつく雨の午後、会場では南地区の皆さんが満面の笑みで待ち受けていて下さった。各地からの参加は四十名。中現俳からは五十嵐会長はじめ十名の参加となった。助っ人も思われる函館の高校生もあり、洋々たる俳句の未来を感じさせられる。

佐藤日和と南北海道現代俳句協会事務局長の司会で幕が開いた大会は、都賀由美子会長の挨拶に続き、対馬康子氏の紹介のあと講演が始まった。

演題は「斌雄・青邨・朗人―こころの高まり」。中島斌雄、山口青邨、有馬朗人らの俳句への向き合いかたに焦点をあわせ、対馬康子氏自らの俳句観の形成の経過を語られた。明瞭なトーン、説得力のある論旨に魅了された。ながら瞬く間に時が過ぎて行つた。

函館市中央図書館長の来賓御挨拶の後、顕彰へ。成績発表、賞状授与、入賞者の方々への万雷の拍手と、いつもながら厳肅な光景である。講師の対馬康子氏、各地区の会長の講評のあと、次期大会を主管する石川青狼東北海道現代俳句協会会長と鮎橋郁香事務局長からの案内を経て、大会は無事終了した。

十階レストランに会場を移しての懇親会は二十八名の参加。暮れなずむ函館港を眼下に、各テーブルは和やかに胸襟を開いた宴となり、日頃の無沙汰なども一気に解消された時間となった。

(えぐさ・かずみ 草木舎・歯車)

第三十三回 北海道現代俳句大会

入賞作品(関係分)

北海道現代俳句賞 江別市 長野 君代

明日からもずっと老人桃の花

函館市長賞 札幌市 永野 照子

逃げ水を追ひこさぬやう霊柩車

NHK函館放送局賞 札幌市 平尾 知子

夜焚火や縄文人の顔となる

北海道新聞函館支社賞 札幌市 金子 真理子

雪のふる町どこからも遠い町

佳作 札幌市 小川 桂

葉桜の雨は父性に近くなる

札幌市 遠藤 由紀子

パン種も猿もまどろむ雨水かな

札幌市 松王 かをり

生牡蠣を吸れば夜の滑り落つ

※一人一賞のため賞外 札幌市 平尾 知子

雪を搔く雪に埋もれて雪を搔く

札幌市 小川 桂

父がゆく綿虫の群れ毀さずに

対馬康子先生の特選 札幌市 荒川 弘子

がうがうと大吹雪老人を捲く

札幌市 小川 桂

葉桜の雨は父性に近くなる

札幌市 五十嵐 秀彦

一棹の血となり立てり吹雪野に

札幌市 五十嵐 秀彦

第34回 北海道現代俳句大会のご案内
(東北海道現代俳句協会主管)

- ◇日時 令和7年6月8日(日) 13時より 大会会費 1,000円
- ◇場所 釧路センチュリーキャスルホテル・平安の間(釧路市大川町2-5)
TEL 0154-43-2111
- ◇講演 五十嵐秀彦氏(中北海道現代俳句協会会長・俳句集団【itak】代表) 演題「未定」
- ◇講評 道内主要作家
- ◇応募規定 2句1組 1,000円 所定用紙または原稿用紙を使用、投句料は作品に同封のこと
- ◇応募先 〒088-0612 釧路郡釧路町雁来1-34 西村奈津方 TEL 0154-36-7823
- ◇出句締切 3月末頃(詳細未定)
- ◇懇親会 大会後同会場にて 懇親会費 6,000円(当日受付にて)

◆ 詳細は引き続き会報102号・103号にてお知らせいたします ◆

令和6年度中北海道現代俳句協会 「俳句研究交流句会」のご案内

〈事前投句とし、当日は選句・選評に十分な時間を割きます〉

- 1 日 時 令和6年8月24日（土）受付開始11時30分・開会12時・閉会15時40分ころ
- 2 会 場 かでる2・7 820研修室 札幌市中央区北2条西7丁目 TEL 011-204-5100
※昼食は各自お済ませ下さい
- 3 出句締切 令和6年8月10日（土）消印有効
- 4 会 費 1,000円（当日受付・学生無料）
- 5 問 合 先 組織活動部 鹿岡真知子 TEL 011-694-6075
または事務局 F よしと TEL 011-641-1007
- 6 送 付 先 〒005-0022 札幌市南区真駒内柏丘1-6-7 近藤由香子 TEL 011-584-0234

北海道立文学館特別展 「虚子・年尾と北海道」

齋藤雅美

展示室に入って先ず目を引いたのが「ホトトギス」の数々の表紙だった。洋画の中村不折や下村為山、日本画の川端龍子や横山大観など隆盛期の画家が起用された表紙絵に、墨書や図案化など様々な字体があしらわれ、何れも品のある魅力的な装丁で見入ってしまう。近代俳句界における嚆矢ともいえる俳誌に託した目標の高さや期待の大きさを示しているようだ。俳句のみならず夏目漱石の小説や寺田寅彦の随筆なども掲載され、競合するような雑誌など少ない時代に、文芸を欲する人達は大いに興味を抱いてページを繰ったのではないか。

虚子や年尾については小樽文学館の資料や石狩市の年尾の句碑といった知見しかなかったが、展示では多くの写真、著作、解説文によって人柄や活動など詳細に知ることができる。虚子の句集「五百句」「五百五十句」「六百句」の实物は無地の表紙に句集名が配されただけで、「ホトトギス」に比してあまりにも簡素な装丁が意外。即物的な句集名に疑問を感じていたが、実はそれぞれが「ホトトギス」の五百号、五百五十号、六百号の記念として出版されたという。その大らかな趣向に納得した。

年尾は東京高等商業学校の受験に失敗し小樽高等商業学校に入学。しかし、それが虚子、年尾と北海道を結びつけるそもそもの因縁となっ

たわけて、北海道の俳句界にとっては大きな恩恵となった。年尾が小樽にいた関係で虚子も度々来道し、各地で句会を行うなど道内の俳句の普及に寄与したことは展示されている各種資料によって明らかである。小樽高商では年尾が小林多喜二や伊藤整と交友関係にあったことも興味をひく。

「ホトトギス」を扱った所とした俳人達の資料の展示も魅力に富む。以前にコピーを入手した「鬼城句集」の实物を見たことは収穫で、小さく素朴で色褪せてはいるが鬼城の句の如く確固たる存在感がある。筆者の師系である飯田蛇笏の短冊（芋の露連山影を正しうす）の直筆は初見であった。虚子との確執から久女の生前には出版できなかった「杉田久女句集」にも注目。久女没後に息女の石昌子によって上梓されたが、虚子が久女の遺稿から選句し序文も書いており、師弟関係の複雑さを考えさせられる。

スペースに限りがあり紹介しきれないのは残念であるが、この特別展で驚いたのは書籍、資料の殆どが北海道文学館の所蔵であること。北海道にとつて極めて貴重で誇りうる財産である。願わくば、今後もこれらの所蔵物を拜見できる機会を設けていただければ幸いである。

（どういとう・まさみ 秋・道俳協事務局長）

※六月九日に終了した本展の対談「虚子の心を引き

継いで」は道立文学館公式YouTubeにて無料公開

中。また図録は千二百円でお求めいただけます。

<https://www.youtube.com/watch?v=Mrm8nkZHWTI>

礎

近藤潤一

略歴 昭和六年〜平成六年、享年六十三。函館市生まれ。北海道大学大学院博士課程修了。古代中世和歌史専攻。平成六年同大学文学部教授を退官。同年北海学園大学文学部教授、北海道大学名誉教授。昭和二十一年齋藤玄に師事、壺俳句会入会。昭和五十五年編集長。平成三年主宰。句集に『雪然』『秋雪』（第十二回北海道俳句協会鮫島賞）遺句集『楡の枝』。俳論に『玄のいる風景』『北の季寄せ』。俳人協会評議員。

滑空のあはれのために枯葉せり
日の入の山の最後のこゑも瀧
立冬やひとり歩きに雑木群れ
玄の忌へ立夏のさくら咲きにけり
何処より還りし今か青山河

「壺」主宰 高橋 千草 抄出

比良暮雪

略歴 明治三十一年〜昭和四十四年、享年七十。小樽郡生まれ。小樽高等商業学校在学中、松原地蔵尊らと俳句会「緑丘吟社」を創設。高濱年尾の入学を機に虚子のちに蛇笏らに師事し「ホトトギス」「雲母」などに投句。教職勤務等のかたわら、後進の育成指導にも尽力。主著に『北海道樺太新季題句集』『北海道俳壇史』『小樽俳壇史』。句集『雪祭』『ななかまど』『定本比良暮雪句集』など。

芝原のいづちともなく轉れり
サルビヤの絢爛として野山鏗ぶ
雪虫の群れたる中の立話
慈善鍋鉄扉降りたるビルの間
凍れ戸を苛立ち打てる日暮かな

「雪華」青 山 醉 鳴 抄出

〔青のフロント 四月〕 佳句抜粋

手鏡の奥へ春光届きたる

加藤 恵子

美ら島の命どう宝四月尽

谷 花丸

無尺講鶯餅の付録かな

藤 原 ハルミ

縛られたふらここ見上げ子等の声

石 本 雪 鬼

はなうたの軽き歩みで四月尽

梨 山 碧

仏生会鯨飛ぶ日の青い空

五十嵐 秀彦

ともだちと一緒に蒔けぬ種がある

F よしと

早々に決意燃えつき四月尽

中 村 みずほ

花人となるため逢ひにゆく今宵

増 田 植 歌

鐘おぼろ歩幅小さく振りだせば

青 山 醉 鳴

◎以下の誤植をお詫びして訂正いたします

〈会報一〇〇号〉

六 頁 秋思ともちがふココアの膜吹きて

六 頁 祝祭のやうに雪降る鹿の死へ

十六頁 沖繩の地図は別枠黒日傘

〈令和五年度・一人一句集〉

四 頁 朝まだき鶴一声の息光る 小路裕子

〈第34回 中北海道現代俳句大会〉

- 1 日 時 令和7年4月6日（日）13時より
- 2 会 場 かでる2・7 710号室 中央区北2条西7丁目
- 3 会 費 大会費：1,000円 当日支払（学生無料）
- 4 講 演 未 定 演題「未 定」
- 5 講 評 道内外主要作家
- 6 出 句 令和6年12月応募開始～令和7年1月中旬頃締切 ※詳細決定次第ご案内
- 7 問合せ 〒063-0811 札幌市西区琴似1条1丁目2-38 琴似コート614号室 金子真理子 TEL 011-644-5193

- 第25回中北海道現代俳句協会賞顕彰も行います
- 懇親会等の詳細は102号にてご案内

〈第35回 北北海道現代俳句大会〉

- 1 日 時 令和7年4月13日（日）13時より
- 2 会 場 ときわ市民ホール 旭川市5条通4丁目
- 3 会 費 大会費：1,000円 当日支払
- 4 講 演 未 定 演題「未 定」
- 5 講 評 道内外主要作家
- 6 出 句 令和6年12月応募開始～令和7年1月下旬頃締切 ※詳細決定次第ご案内
- 7 問合せ 〒078-8320 旭川市神楽岡10条1丁目2-2 加藤ひろみ TEL 0166-65-0820

- 懇親会等の詳細は102号にてご案内

第25回 中北海道現代俳句賞 作品募集

〈 応募要領 〉

- 1 応募作品 題名をつけ、未発表20句（過去の応募作品の再応募は不可）
- 2 募集期限 令和6年12月15日消印まで
- 3 募集対象 令和6年11月15日現在、中北海道現代俳句協会会員の方または石狩空知後志振興局管内にお住まいの非会員の方
- 4 応募用紙 指定の用紙を使用 会員には会報101号に同封
※非会員の方は顕賞係へ返信用封筒に〒・住所・氏名を記載し
切手貼付のうえ指定の用紙を請求下さい
※以下の協会HPからダウンロードも可能です（A4にて2枚）
<https://gendaihaiku.gr.jp/area/naka-hokkaido/>
- 5 応募方法 応募料3,000円を定額小替為、または現金書留にて指定用紙同封
- 6 顕 彰 令和7年4月の中北海道現代俳句大会席上
- 7 作品送付先 〒061-2284 札幌市南区藤野4条5-19-6
菅井美奈子方 中北海道現代俳句協会 組織活動部行
- 8 選 者 五十嵐秀彦・石川美智子・齋藤雅美・瀬戸優理子・松王かをり 以上5氏
- 9 問 合 先 会 長 五十嵐秀彦 TEL 011-852-7014
顕賞係 菅井美奈子 TEL 011-592-6426

幹 事 会 報 告

R6.5.16 (木) かでる2・7 610室

- 1 第33回中北海道現代俳句大会報告（事業部）
- 2 令和6年度俳句研究交流句会（組織活動部）
- 3 第25回中北海道現代俳句賞（顕賞係）
- 4 会報101号（広報部）
- 5 三役顧問／中現俳賞選考委員の会（事務局）
- 6 今年度の事業関係について（会長）
- 7 その他（事務局） ※出席者 14名

R6.7.18 (木) かでる2・7 610室

- 1 第33回北海道現代俳句大会報告（事務局）
- 2 四地区会長／事務局長会議の報告（会長）
- 3 第34回中北海道現代俳句大会（事業部）
- 4 令和6年度 俳句研究交流句会（組織活動部）
- 5 会報101号・102号（広報部）
- 6 第25回中北海道現代俳句賞（組織活動部）
- 7 第34回北海道現代俳句大会（東北北海道主管）
- 8 三役顧問／中現俳賞選考委員の会（事務局）
- 9 その他（事務局） ※出席者 16名

第1回 杉野一博学生俳句大賞「肋木賞」 〈 応募要項 〉

- 1 目 的 長年、学生の俳句の審査や助言、講師として尽力いただいた故杉野一博氏の意志を継ぎ、次世代で活躍する俳人（俳句作家）を育成、顕彰することを目的に創設
- 2 主 催 北海道現代俳句協会
- 3 後 援 北海道高文連文芸専門部・髯俳句会 他
- 4 募集対象 令和6年度、中学・高等学校・中等教育学校・大学に在籍する者
- 5 募集形態 1人5句（未発表）、wordデータ出句
題名不要、書式は下記までお問合せ下さい
- 6 応募先 北海道現代俳句協会 佐藤日和太
Email hinata373@ncv.jp
- 7 応募期間 令和6年10月1日（火）～10月31日（木）
- 8 賞第1席 杉野一博学生俳句大賞「肋木賞」
第2席 杉野一博学生俳句準大賞（各々賞状・副賞有）
- 9 選考委員 都賀由美子・中西芳之・佐藤日和太・三嶋渉
- 10 入賞者発表 令和6年11月30日（土）入賞者には別途連絡の他、北海道現代俳句協会公式フェイスブックにて発表

一般社団法人 現代俳句協会 入 会 の ご 案 内

（一社）現代俳句協会では、多くのみなさまのご入会をお待ちしております。ご家族・ご友人にも是非ご紹介ください。入会金・年会費など事務局までお問合せ下さい。

やっと、夏らしい気候が続き北海道の良い風景を楽しめる時期となりました。みなさまにはいかがお過ごしでしょうか。

四月七日の中北海道現代俳句大会は、この会報で報告の通り盛大に開催され無事に終了いたしました。関係各位のご協力と、多くのみなさまのご参加に心から感謝いたします。

六月九日は函館で北海道現代俳句大会があり、これに先立ち四地区会長事務局長会議が開かれました。道内四地区からそれぞれの活動状況の報告がありましたが、いずれも会員数の減少による維持運営の困難さが共通の話題でした。今後の地区主管の全道大会の開催にあたっては、執行者の不足を補うために各協会間で協力体制を敷くこと、また各賞の煩雑な事務手続きを省くため、行政長や放送局・

新聞社等の名を冠した賞を取りやめ、四地区現代俳句協会会長賞など協会内で対応可能なものに切り替える方向で意見が一致しました。

このあとの当協会のイベントは八月二十四日の「俳句研究交流会」になります。すでに七月初めに往復葉書にて出欠・投句等の連絡をしておりますが、今号にも改めて開催の告知を掲載しました。会員内外を問わず、多くのみなさまのご参加をお待ち申し上げます。ご希望の方には投句葉書をお送りしますので、ご興味をお持ちの友人などがいらっしやいましたら、是非ともお誘いください。

今号より会報がリニューアルしました。紙面を見やすく、内容をより充実させて、各種情報提供や会員のみなさまの交流にお役立ていただければ幸いです。みなさまの句会のご紹介や句集の鑑賞、エッセイなども盛り込んでいくことができたらと考えております。

会員動向

〈住所変更〉大橋 弘典
島崎 寛永、村上 海斗

〈退会〉
白井 節子、菅原 湖舟

〈地区移動〉
中村きみどり（東北北海道へ）

会員数106名（R6年6月現在）

中北海道現代俳句協会 会費納入のお願い

当会年会費2,000円の納入は振込です。手数料もご負担下さい。口座番号は以下です。
02780-9-48961

中北海道現代俳句協会 入会のご案内

当協会にはお住まいの地域に関わらず入会頂けますが、その際（一社）現代俳句協会の入会が必須となっております。ただし他の地区協会にて既に（一社）現代俳句協会会員となっている場合、重ねての入会は不要です。不明点は事務局にお尋ねください。

「青のフロント句会」

偶数月第2土曜日13～16時
会場：かでの2・7
席題有・当季雑詠3句
問合せ先：五十嵐秀彦
Tel 011-852-7014

会員以外の参加を歓迎しています。お誘いあわせの上お越しください。

会報一〇一号をお届けします。今回より紙面を大幅にリニューアルしました。サイズはA4版、フォントを大きく見やすくし、掲載できる内容が二割ほど増えました。巻頭言はこれまでより長文とし、他には文学館の特別展「虚子・年尾と北海道」のレビューを齋藤雅美さんにお願いしました。「礎」欄もふたらずつ紹介します。今回は俳誌「壺」の主宰・高橋千草さんに近藤潤一さんを紹介して頂きました。これからは折々に当協会外部の方々にも執筆をお願いする予定です。また、会員のみなさまからの句会情報などを掲載する余白も得られます。みなさまの交流の一助として会報をご利用いただければ幸いです。

六月に終了した文学館「虚子・年尾と北海道」は北海道ホトトギス俳句大会とのリンクージも考えられたものでした。稲畑廣太郎・星野高士両氏が来札しての大会にこの企画は花を添え、現代俳句協会・伝統俳句協会の会員がそれぞれ協力してひとつの目標に向き合えたことは、北海道の俳句界にとっても大きな収穫だったのではないのでしょうか。一見増えている俳句人口ですが、協会員はなかなか増えないのが現状。それぞれの協会の垣根を越え、縦横に俳句の魅力を発信していくことが今、求められているのかもしれない。